

懇談会概要

■開催日時：令和8年3月30日（月）10：00～12：00

■開催場所：九段第3合同庁舎 15階会議室

■出席者

- [委員長] 屋井 鉄雄 (東京科学大学特任教授・名誉教授)
- [委員] 池邊 このみ (千葉大学グランドフェロー) (WEB)
- 小幡 純子 (日本大学大学院法務研究科教授) (WEB)
- 佐々木 淳 (東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)
- 白石 和泰 (TMI 総合法律事務所パートナー弁護士
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授)
- 寺部 慎太郎 (東京理科大学創域理工学部社会基盤工学科教授)
- 中村 英夫 (日本大学理工学部土木工学科教授)
- 二村 真理子 (東京女子大学現代教養学部経済経営学科教授)
- [事務局] 関東地方整備局千葉国道事務所長 堤 啓
千葉県県土整備部道路計画課長 近藤 亮
千葉市建設局道路部長 (代理)建設局道路計画課長 小池 雄一
市川市道路交通部長 米崎 勝則
船橋市建設局都市計画部長 杉原 弘一
習志野市都市環境部長 (代理)都市環境部副技監 斎藤 義之
市原市土木部長 (代理)土木部次長 北森 努
浦安市都市政策部都市政策部長 須賀 真 (WEB)

■次第

- (1) 第2回コミュニケーション活動の意見の分析
- (2) 第2回コミュニケーション活動の意見への対応
- (3) ワークショップの必要性和進め方(案)
- (4) 今後の進め方

■主な意見

- 寄せられた多数の意見については、クロス集計を行ったことで地域別の意見の傾向を確認できた。アンケートの「強くそう思う」「全くそう思わない」という明確な意思だけでなく全ての意見を受け止めることが必要。
- 一部地域では渋滞の改善等の必要性が低く捉えられている傾向がみられるが、現在は、多様な意見があることと、その背景にある意図や関心事をしっかりと受け止めている段階であり、クロス集計を通して理解を深めることができた。
- ルート案に対する意見について、個々の案を図化しているが、現段階では専門的見地から評価されたものではない。今回は、多様な意見を行政が意見要旨と対応案として受け止め、独自に解釈して整理した段階であり、意見を受け止めたという観点で

は、ニューズレターの作成にあたって、すべての案を図化した方がよい。

- 住民の立場から回答いただいたアンケートに加え、産業の立場からの意見もいただいております。今後はニューズレターにおいてもそのことが分かるように工夫できるとよい。
- ルート構造に関する意見に対して、第一段階のスクリーニングを行う際には、『検討対象』や『前提条件』との整合性と、『評価項目』の合理性を分けて考えることが理解できるよう、整理を工夫できるとよい。「達成すべき目標に適合している」という前提条件については、評価項目の一部にもなっており、整理が必要である。
- 先送りにしていた「道路計画の必要性」については、今回定量的なデータ等が示された段階であるが、今後ニューズレターやワークショップの場などを通じて、その情報を広く伝える工夫が必要である。
- 将来の交通需要予測は、現在可能な技術やデータの範囲で最善を尽くしていくことが大事。自動運転などの不確定な要素を組み込んだ将来予測は、現時点では手法が確立されていない中、幅をもって将来の交通量等を定量的に示すしかないのではないかと。
- 推計に反映することが困難な将来の時代の変化については、「配慮事項」や「付帯事項」と関連させる等で定性的に対応の方向性を整理して示していくことが必要。
- 成田空港の第二の開港を見据えると、貨物量の増加や湾岸エリアの交通需要の増加にもつながってくることが想定される。千葉県で整理している基本方針についても併せて説明していくことが必要。
- 市町村の地域計画等と整合を図り、ワクワクする未来の絵姿を作っていくことも進めてほしい。
- 地域により多様な意見があることから、ワークショップのような対話型の取組みが重要であり、ワークショップでは違う考えを持つ方々が同じ場で対話することにより、相互理解を促進できることが望ましい。
- 立体・平面の構造によらず、道路排水は今後問題になるのではないかと。例示された既存の技術にとらわれず、「グリーンインフラ」のような未来の技術を盛り込むことも検討する必要がある。
- 港湾事業では、生物共生型の構造物、いわゆる「ブルーインフラ」という考え方があり、環境に影響を与える場合、ミティゲーションの考え方を含めて配慮することを検討してほしい。